

伊藤昌哉氏（元池田勇人首相秘書官）に聞く

# 池田内閣の舵取り役

―聞き手・宇治敏彦



第1次池田内閣組閣後に記者会見する池田首相、大平内閣官房長官、伊藤首相秘書官（左から）（1960年7月19日）

## 池田勇人内閣誕生の経緯

去 華 就 実

——伊藤さん、今日は三つテーマがありましたね、第一は池田勇人内閣ができた頃の官房長官としてのオトウチャン（大平首相）と総理大臣秘書官としての伊藤さんとの付き合いというか、仕事も含めて、その頃のことを、お伺いしたい。第二は大福提携。これは伊藤さんがいろいろ書いていらっしやるけれども、その長いストーリーを要約して、なぜ伊藤さんが大福提携が必要だと思われたかという理由と、その後の展開、最後の結末。第三は、一番最後にオトウチャンと病院でお会いになるわけですが、その時のこと。この三つをお伺いしたい。

伊藤 だいぶ前のことになりますけれども、私は『池田勇人 その生と死』にも書きましたけれども、池田という政治家に非常に興味をもったということが一つあるんだね、新聞記者として。これは新しい時代をつくる男かもしらんなど。吉田茂（首相）との関係がよくてね、ものすごくラッキーな男で、GHQ（総司令部）との関係からキューと上がってくるんだよね。総司令部が吉田内閣を経済で、九原則という奴でいじめるわけだね。そのことを一番よく察知したのが白洲次郎（吉田首相側近、東北電力会長）だよ。大変だ、これは大蔵大臣にすっかりした奴をつくって、総司令部に対抗しなかったら、何もできなくなるぞ、ということを考えたらどうだね。軍事政権に対して対応できる、それには経済をよく知っておって、日本のことをよく知っておって、合理的にアメリカの考え、発想法にもとづいて、向うに反対できる男を見つけないといけないということで、死にもの狂いになって見つけたんだらうな。

## 池田内閣の舵取り役

そして吉田が宮嶋清次郎（元日清紡績会長）にどうだと言ったら、宮嶋の子分だった桜田武（元日経連会長）が「池田という奴があるんだけど、どうだろう」と言って……。あの時に池田は次官会議に出ておったんだよね、日本商工会議所会頭になった永野重雄が経済安定本部の副長官として。その時に池田と佐藤栄作が次官会議をリードし、全部二人で会議を（タグマツチで）持っていてしまっただよ。閣議の前の次官会議だから非常に重要なんだよね。国策を決めるのも殆どそこで決まっちゃうんだ。そういう次官会議を見ておるものだから、桜田が「それじゃ池田がいいんじゃないか」ということを言ったら、人物検査をやってみるといので、宮嶋が「今の日本の一番のポイントは何だ」と言ったら、池田が「財政問題だ」と言って、公債なんかの話をするのと、もう一つは「共産主義だ」と。これに対抗するためには経済をしつかりしないと、日本は共産党によっておかしくなってしまう。そうするとアメリカの支配がものすごくおかしくなっちゃうから、これに対抗する経済政策をわれわれは展開しなけりゃいかん、と言ったら、彼の考えていることと同じだったから、「よし、君やれ、大蔵大臣を」と言って。大蔵大臣をやれと言われたって、あなたは総理大臣ではないんだから、「吉田さんかどう言つか分からない」と言ったら、「いや吉田のことはまかせろ。俺、頼まれてるんだから」とは言わなかったけれど。あとから、そういう話をして。池田はまさに時代の要請にしたがってるんだ、と。

——そこで、池田蔵相ができた時の秘書官には、オトウチャンのほかにどんな顔触れでしたか。

伊藤 その時に、池田は大蔵次官はしていたが、政治家としては一年生で大蔵大臣になるわけだが、彼は大蔵大臣をやるについてのスタッフをもっていないんだよ。それで、次に次官時代に目をつけて

実いた男をそのまま使ったわけだ。この秘書官が実は彼の情報機関であり、神経細胞だったんだな。大平、宮澤喜一、黒金泰美それから稲田耕作。これは全部、大平が人選したんじゃないかな、と思うんだけれどね。大平がいちばん池田に近いんだよね。そして、大蔵省の中に派閥があつてね、福田赳夫派と反福田派だ、主計局派と反・主計局派。主計局をもつ福田は握つちやつているんだよ。次の主計局長になる奴も全部、福田系なんだ。主税局派の池田というのは、芽が出てこないんだね。それで、

池田にしる前尾繁三郎にしる、全部、主税局の連中は福田派からガクーンとやられている。これは大福提携の時まで続くんだ、ずうつとね。大蔵省は全部、福田が主計局のオールマイティーで、予算を握っていたのは福田だったんだよ。そういうところで大蔵官僚の中の反主流派の池田がその後、政界に出てきて政界はもちろん、大蔵省の中核を握った。これが宏池会です。大蔵省の中で俺がやつたら、こつやるぞというのが、一時、政界、官界の主流となつたわけだ。ただし、それは理論化されていなくて、いけどね、まだ。それで、いろいろ中間安定政策とか、現状に合つた経済政策というものを、財政経済政策というものをやるのはみんな福田系がやっていたわけだ。それに対する対抗が宏池会になつた。池田首相のブレーンと言われた下村治（日本開発銀行理事）、高橋龜吉（経済評論家）らだった。

——伊藤さんの『池田勇人 その生と死』にも出てくるんですけれども、池田内閣ができた時に大平さんは「あなたは、なつたんだから、いつ辞めてもよい」とか、それから「ゴルフは止めてくれ」とか、「寛容と忍耐」のキャッチフレーズとか。その池田内閣ができた時の大平さんの役割というのは、どんなものでしたか。

## 池田内閣での大平官房長官の役割

伊藤 大平の役割はね、池田の考え方をいかに政党と国民の中へ浸透させていくか、なじませる役割ですね。これはね、僕は大平に言ったんだよね。「あんたは、どうして池田の信頼を得ているんだ。俺は良く判らない。別にあんたは、すぐれていて英語ができるとか、外交センスがあるとかというものでも何でもないんだけど、オトウチャンあんた一体、どういうわけだ」と言ったら、「一番信頼しているのは俺なんだ」と。「反主流で福田派と闘っている時に、俺と会つと、池田さんはなんで心が伸び伸びするんだ」「ああそうか、それでいいんだな」と。池田はいちいち大平と話をしながら全部、大蔵省の会議が終わつた後、必ず大平を誘うんだつて。「おい、今晚、飲みに行こうよ、一緒にこい」と言つて。大平を相手に池田は自分の考え方をブツたりね、面白くない。こうなんだ、ああなんだと……。

池田の考え方を一番よく知っているのが大平なんだ。前尾もよく知っているけれどもね、前尾は頭がよすぎて、池田は「俺の体と前尾の頭をくっ付ければ天下無敵だ」と言つたんだからね。前尾には一目も二目も置いていないんだよ、税制の面でも前尾の考え方には。だから、ちょっと何か気軽に何でも話すという関係にはないんだよ。大平との関係ではあるんだよ。宮澤との関係でも、ちょっとね、「これを言ってしまったら、後でひどいことになるかもしれない」と思つて、ふっと止めてしまうというようなことが、池田の場合あつたと思うのですよ。しかし大平の場合は、結局、人間関係ですよ。何でも大平には喋れる、安心なんだね。伸び伸びとできるわけだよ。池田の長所も弱点も全部、知っ

実 ているのが大平。

就 その大平が池田をどうやって政界になじませていくか、派閥の中で福田と同じような役割で、池田  
華 を潰そうと考えている奴はいくらでもおるんだから。そいつに対応していくためにはどうしたらいい  
かということをも、ものすごく考えるんだね。このオトウチャンというのはね、細かいところに気のつ  
去 く男だね。それは僕は後で秘書官になってから判った。

——池田内閣の考えを国民に知らせるのにオトウチャンがいろいろ知恵を出した。一番成功したも  
のは何ですか。大平さんが出して成功したものは？

伊藤 いろいろの問題がありますけれども、結局、池田が行き過ぎるわけだね。「それは総理、ち  
よっと今は早いですよ」というようなことで、陰で全部、助けているんだよ。だから、失言を随分、  
僕は止めていると思うよ。ブレーキの役をしているね。そのことを、池田はよく知っているんだ、自  
分でも。

——ちよっと戻りますけれども、池田さんが昭和三十五年（一九六〇年）七月に政権を取るでしょ  
う。その時に内閣官房長官の候補にはオトウチャンしかいなかったのですか。

伊藤 ほかにはいなかったね。いろいろ自薦他薦の人はあったよ。しかし、「一番むずかしいのは、  
官房長官だけだね、アレ大丈夫かな」と池田が俺に言うんだからね。それは、新聞記者出身のお前な  
ら判るだろう、という意味なんだよね。池田が組閣で一番心配したのは官房長官です。これは内閣の  
スポークスマンで、ジャーナリズムとの接点だ。ウルサ型の官邸の記者と一日に何度も記者会見をし  
て、これがその日の新聞、テレビの流れ（なかみ）をつくって行く。官邸記者とケンカしたら、池田

## 池田内閣の舵取り役

内閣は一月ともたない。官僚出身の多い宏池会で官房長官になれる奴は誰だ。新聞記者出身のお前なら判るだろうというわけだ。私は大平ならやれると思った。彼なら政策のアカウンタビリティー（説明）の能力があるからね。

——それはオトウチャンについてですか。

伊藤 オトウチャンについて。「大平でどうだ」と言うから、「いいんじゃないですか」と言った。「じゃ大平かなー。ほかにいないかなー」と言うので、「いや、官邸と記者団との喧嘩を悪い言葉で言えば、うまく丸め込むことのできるの、オトウチャンしかいませんよ。オトウチャンでいいと思います」と答えた。それは、反主流派の時の、鬭争した時にスポークマンを全部やったんだ、大平が。私は、もつほとんど出ませんでしたけれどね。何かちよつと記事の上ではいろんなサジェスション（示唆）をしたことはあるけれどもね。努めてそれはやったらいかんと思つてね、やらないことにしておつたけども、全部、大平がやった。

それでね、大平がおそらく総理秘書官に俺を推薦したんじゃないかな、と思ひます。一番最初にね、僕は池田邸に行った時のことだ、初めて池田邸に行つて神妙に玄関のところに坐つておつたら、大平がひよつときで、「おー、プーチャン、君、池田のところにくることになつたそうだね」と言つて、「辛いよ」と一言、耳もとで言つたよ。これは、池田は表と裏があつてね、表は快活そうに言つけどね、中に入つたら細かくて細かくて、どうしようもない、徹底的に鍛えるよ、それに耐えるような力がなかつたら駄目なんだよ、というような意味で。言つたんだらうね。それを大平は身を以て体験したんだと。

実 —— 池田さんは、やっぱり細かかったんですか。

就 伊藤 細かい、ものすごく細かい。大蔵省の役人で税金取りをやっていたんだからね。ものすごく細かい。

去 —— あんまり池田さんから、そんな感じは受けなかったのですけど……。

伊藤 池田は自宅の冷蔵庫をいちいち見るわけだよ。「何やってんだ。これ、いつまでも、こんな物とっておくな、早く出せ」とかね。「晩飯に出すのをいつまで取っておいて……、腐らせるばかりじゃないか」とかね。

—— われわれは、いつも飲んだ時の池田さんしか知らないから……。

伊藤 あれくらい鍛える人はいないんだから。それは博報堂の社長になった近藤道生（元池田首相秘書官）がよく知っている。「俺は辞めようと思った」と言った。秘書官の一年先輩です。彼が辞めた後の後任を俺がやった。

—— あの時は六さん（田中六助氏）がなりたかったんじゃないですか。

### 池田首相と伊藤秘書官の関係

伊藤 六さんがなろうとしたことがあってね。俺を辞めさせてなろうとしたとか、いろいろな話があった。それでも池田は「伊藤は俺のためにきた男だ。駄目だ」と言っただ、はねつけてしまった。一番反対したのは代議士になった登坂重次郎氏だよ。



## 池田内閣の舵取り役

登坂は「ブーチャンは駄目だ。別な奴を入れて、ブーチャンを福岡の大金持ちの代議士秘書官にさせればいいんじゃないですか」と言つてたが、池田は「ブーチャンは俺の秘書官になろうといつてきたんだから駄目だ」と言つて、断つたね。六助の時はかなり考えた節があるんだけど、やっぱり六さんは秘書官にしなかつたね。「ブーチャンがきたんだから」と言つてね。その時に「私は西日本新聞を辞めて、あなたのところに行くんだ」と言つたら、「君は辞めて俺のところに行くんだな」と言つたのでと念を押す。「そうです。社を辞めてくるんです」と。「そうか。ちょっと風呂へ入つて考えるから」と言つて風呂に入つて考えて、宏池会の事務職員ということで採用しようよと。「いつからでもきてくれ」ということを言われて、宏池会に入つたという経緯があるんですよ。

その時に、僕は辛いとは思つたけれども、福岡（西日本新聞）の整理部で二年間こてんぱんにやられていたから、あそこの鍛えられ方を考えたら、どんな仕事でもやれると、それがあつたんで、僕は辛抱したと思う。それじゃなかつたら、辞めていますよ。そんな馬鹿なことできるもんかと。だんだん、池田邸の敷居が高くなるんだから毎日毎日。嫌になつちゃうんだな、これは。池田の奥さんもよくやつてくれたと思う、後でね、栄家という所に池田はいつも行くんだよね。俺が池田と一緒に雨の中をずっときたんだけど、「大臣、私ここで降ろして下さい」と言つて、栄家へ行かなかつたことがあるんだね。国会の近くで、国会へ行きますからと言つて、降りて行つちやつたんだ。そうしたら、「あいつは栄家にきても、俺に挨拶もせず帰つちやつた」と池田はカンカンになつて怒るんだね。つまり、水くさいと言ふんだね。今の話は、そういうこともあつたという話だけで。実際は栄家へ一回行つてね、それから何も挨拶しないでポツとそのまま帰つちやつたことがあるんだ、俺。面白

実  
くないから。

就 —— 池田さんはカチンとくるわけだ。

去 華 伊藤 池田はカチンときたんだろうな。「プー公に言っておけ」と奥さんに言っているわけだ。俺は茶室でそれを聞いていたわけだ。向こうは「あれは、いま何も仕事をしていないじゃないか。しかも米家へきてても、俺に挨拶もせずに帰っちゃった」と。こっちは会ったら何か文句を言われるんじゃないか、会うのが嫌だから帰っちゃったというだけの話なんだけど。そこで池田がひょいと襖を開けると、そこに私がいる。「どうしてお前、帰ったんだ」「あんたがこわいからだ」と言ったら、「どうしてこわいんだ」と聞くから「何か知らんけれども、やたらにこわいんだ」と。そうしたら奥さんがね、「伊藤さん、これからね、あなた池田の側に座ることを修行しなさい。私もそうだったからね。これから晩飯があるんだから、プーチャン、横に座って食べなさい」と言われて、俺もまいったね。池田の前で飯なんか喰えないよ。デスクの前で記事を書いているようなものだ。嫌になっちゃった。「こんな記事、使えるか」と言われて捨てられそうな気がしてね。本当に参ったね。初めはもう大変でしたよ。

ところが、それが池田のやり方なんだって。徹底的に叩いてね、どういいう音が出てくるかというのが見えているんだな。近藤道生が「私は大蔵省の役人です。あなたの側におれないのだから、大蔵省の役人も辞めます」と一言したら「お前、本当に大蔵省の役人を辞めるのか。そこまで決心したのなら、よく分かった」と言って、それから良くなったんだって。池田は一言も言わないが一度、信用したら、どんなエラーがあっても絶対に追及しないね。この点は偉いね。

——それでオトウチャンのほうへ、また話を戻しますが、池田内閣当時の池田、大平の關係はどうだったのでしょうか。

### 池田内閣での池田、大平、伊藤の關係

伊藤　そこで、そういう關係で池田のところだんだんと信用されているうちに、何か知らなければ、演説はみんな俺が書くようになっちゃったんだよ。地方遊説に行った時に、メモで渡したんだよ。挨拶の中にこれを入れたらいいですよと言わずに、黙って入れたんだ。それを見て池田が言うところ、ワーツと拍手喝采が出てくるからね。そうすると、「お前書け、お前書け」になっちゃってね、とうとう演説から、結婚の挨拶から、みんな書かされちゃったな。あれにはまったく参ったね。終いには疲れ切っちゃってね、ノーサンキューだったんだけどね、書かされちゃったよ。そうして、だんだんやつているうちに今度はね、政治的な情勢判断に使われはじめた。「今、お前、政局をどう思うか」と。それで「こうなる、こうなると思います」と。それからね、「今、佐藤栄作はどういうふうになっているのか、河野一郎はどう思っているか」ということを俺がいちいち言うわけだよ。そうすると池田は黙って「ウーン」と聞いておって、「こんなことを言える秘書官っておるのか」とバカに感心してくれてね。

そして後でね、実力者内閣をつくった時がありますね。あの時に大平に下命するんだよ。「お前、今度これを考える」と。そしたら大平が「ブーチャンと相談していたします」と言ったんだよ。「あ

れ、いつの間にか俺を使うつもりだよ、大平が」と思ったが、ともかく大平と相談して、俺が組閥の計画を全部、書いたんだ。書いたんだけど、狙いがあってね。こういうふうにして、こうするよという狙いがあった書いたんだよ。ところが、これね、オトウチャンに渡していいのかな悪いのかなと思つてね、池田に渡さなければいけないと思つたんだな、これ。それで、俺はもう一通書いて池田に渡したんだ。池田はそれを見てびっくり仰天しちゃったんだよ。「こんなことをあの野郎、考えるのか」というのだろうな。それから、僕は、もう政略の中に組み込まれることになる。

——伊藤さんの案は大体、その通りになつたんですか。

伊藤 ほとんどその通りになりました。

——佐藤栄作、河野一郎、藤山愛一郎、みんな閣内に入れたんですよね。

伊藤 全部、入れるんだ。佐藤栄作は入りたくなかつたんだ。それを、どうしても入らざるを得ないような情勢に持つて行こうという過程が書かれてあるんだよ。否でも応でも彼はここへ入らざるを得なくなる、というところの情勢分析を書いておる。ピシッと当たっているんだよ。

——オトウチャンには渡したんですか。

伊藤 オトウチャンにも渡しました。だから、オトウチャンはそれを今度は政務次官を考える時に適用したので、私の考え方が全部出ている。そして、池田は政略について、終いには各派閥の領袖に「もし何かあって、私が東京にいないくて、箱根に行っていて誰にも会わないという時に、何かあなたのほうで政局の中でいろいろ言いたいことがあるんだったら、伊藤ブー公に言ってくれ」と言つたん

だ。あの派閥の領袖の佐藤、河野、大野の全部に言うんだからね。参ったねー。だからね、全部の派閥の長は俺を注目しているわけだよ。「あの野郎、何を考えているんだ」と。「閣僚の人選は誰がやっているんだ」と。「ブー公がやっているんだ」ということが、スーッといつの間にか拡がるようなことになってね、それで「俺、大平に悪いことをしたな」と思った。大平の仕事ですよ、それは。仕事の中に入って行くんだから、オトウチャンとおかしくなる可能性があった。絶対にそんなことはしやいかんというふうに俺、思ったけどね。

思ったけれども、例えば石井光次郎が議長になるうとしてね、「あれ、議長を断るつもりだったんだよ」ということを池田番記者に「お前、言ってこい」と言うんだよ。「ちょっと待って下さい。人事の問題は官房長官の大平さんがやるもんなんですね、私がそれを記者団に言ったんじゃ問題を起しますから」と言ったらね。「駄目だ、お前、行ってこい」と。しようがない、行ってね、「池田としては、こういうふうに思っているんだよ」ということを言わざるを得なかった。オトウチャン、面白くなかっただろうと思うけどね。そこら辺から大平と俺との関係がおかしくなるんですよ。池田と大平がおかしくなるのは、随分、後からです。そのきっかけは大平が官房長官を辞めたくて辞めたくてしようがない。それを池田は「お前やれ」と言うわけです。それで大平は田中角栄と結んで反対するわけだよ。

——なんでオトウチャンは嫌だったんですか、官房長官が……。

## 大平が官房長官を辞めたかった理由

伊藤 苦しかったから。いつも一〇〇点を採らなければいかんからね。フラフラになって、もう心身ともに疲れ果ててしまう。

——あの当時は内閣官房長官は大臣じゃないんですよ。閣僚としてでなく、五と計算されていた。それでね、オトウチャンの負け惜しみじゃないけれども、「これ見てごらん、俺は猛獣使いだ。猛獣と同じ立場に立つたら食べられちゃう、ライオンにね」。こう言っていましたよ。

伊藤 しかし、大平はね、力はまだ無かったね。だけれども、猛獣使いをやらされて危険で危険でしようがない。彼はフラフラだったと思うよ。ところが池田は俺に自動車の中でこう言うんだよ。これはお前、大平に言えということだよ、今から考えると。「大平がね今、独立したいんだと。俺もそうだった。吉田の下におってね、いつまでも吉田の傀儡じゃ嫌だという気持ちがあったんだけど、しかし最後に問題をこの人のところに持って行けば大丈夫だという人を持っているということが、どんなに心が安まることであるか、安心する材料であるかということは大平はまだ知らん。俺の官房長官として五年間やって見る、たいへんな実力者になる、俺をしのぐ実力者になる。前尾なんか全然、問題にならなくなってしまう。俺の側におってやって見る。そうして卒業したら、たいへんな実力者になれるんだよということを知らない。それで安易に逃げようと思っている。俺も昔、そう思った。しかし、いかに大事かということ、後から独立したら分かる」と。

——大平さんと前尾さんと角さんの三人に、大蔵大臣と外務大臣と幹事長を「お前ら三人でやれ」と言ったのは、その頃の話ですか。そして大平外相が日韓問題で池田首相とおかしくなるのですね。

### 日韓問題で池田・大平がおかしくなった理由

伊藤 その頃の話ですよ。池田はよく人間を見ている。そして大平を育てるつもりがあったと思う。ところが、それがオトウチャンには分からなかったね。

それから、もっとはつきりした問題で、大平と池田がおかしくなった一番の大きな問題は、日韓問題だ。はじめ日韓の問題を池田はあまり考えていなかった。日韓より日中だったんだ。それで日中の問題を解決するには、どうしてもアメリカの力が要するというふうに思っていたんだよね。そこでね、第一回のケネディとの会談の時に、ケネディが仲介に立って日中の問題をまとめてくれ、「あなたができるのが一番いいんだから、やってくれんか」ということを言うんだけど、俺は米韓条約があるからできない。それよりも池田さん、あなたに頼みがある。日韓だ。韓国の問題は日本が中心になってまとめなければ、どうしてもまとまらないという決定的なキー・カントリーだ、日本が。それをあなたにやってもらいたいと思う」とケネディが頼むんだよ、池田に。いま北朝鮮の問題で、ペリーがやっているのを見て、俺は非常によく分かるね。日本を何とかして入れて、まとめよう、まとめようとしている。それはアメリカの伝統的な、恐らく外交の原則なんだろうね。

それでアメリカは日中の中に立てないというのだったら、代わりに誰がいいんだと言ったら、イギ

実  
リスはすでに中国を承認しちゃっているから、しかも香港の問題があるからとても出られない。後は  
就 ドゴールのフランスしかない、フランスならいいだろう、これをやれということ言うわけですよ。  
華 つまり、日韓とドゴールが天秤にかかっちゃった恰好だね、池田から見たら。それで、ドゴールを中  
心にして中国を承認する。戦勝国でないと中国を承認できないのですよ。戦敗国の日本が中国を承認  
去 するなんておこがましいことを、できるわけがないじゃないか。だから後からついて行かざるを得な  
い。ドゴールにまとめさせる。中国を認めたとたんに、台湾は外交断絶になっちゃう。このドゴール  
方式を説いたのが池田なんだよ。それがヨーロッパ外遊の一番の狙いで、彼は行った。そして他の問  
題では「トランジスターのセールスマン」と言われているんだが、実際はアジア最大の問題を彼らは  
解決したんだよ。このドゴール方式をオトウチャンが後でやったわけだ、最後に記者会見で。

——すごいアイデアですね。

### 池田首相のすごいアイデア

伊藤 日中の問題は、池田がかかわってね、その問題で日韓の問題をきっかけにして、そういうと  
ころが、アメリカとの間、ものすごくはつきりした情勢になってきた。アメリカ、イギリス、中国、  
フランス、ドイツを全部ひくくめた外交方針で世界的な視野から見た日中問題の解決という、こん  
なものすごいアイデアは、吉田、池田の考え方なんだね。それをやっちゃうわけだよ。彼はこうい  
う状態で日本に帰ってきているんだ。その時に、留守中に外務大臣の大平が金鐘泌韓国中央情報部長



との話し合いで、OKを出しちゃうんだ。無権代理したわけなんだな、池田から見たら。「怪しからん、何しやがってんだ」と。大平はいつも池田にちゃんと「総理、こういうふうなことになるっていますから、私こうしますよ」と言うのに、何でこの問題を先にやっちゃったんだと。しかも、ケネディに池田が、「それじゃ私は韓国の問題を引き受けてやります」と言っただけで帰ってきた最大の問題であった。俺は、この問題では嫌な感じだったからね。どうしてケネディに約束なんかするんだ。韓国の問題を第一にやっちゃって、当時の国内政治情勢では誰も点数を上げたと言わないからね。それから、これは必ず後を引くからね、韓国との問題というのは。これは嫌な問題だなと思った。中国との問題だったら、ヤッターというので鼻が高くなり、功績になるけれども。

——ではオトウチャンは総理に全く報告してないんですか。そんなことはないでしょう。一応、電報を打ったり電話を掛けたりしたんでしょう。

伊藤 そういうことはしたんだけど、これでまとめるという決心をして、OKしたのは、池田に相談しないでやった。

——大平・金メモ問題ですね。昭和三十七年（一九六二年）にオトウチャンと当時、韓国中央情報部長だった金鍾泌氏の間で、請求権問題について無償三億ドル有償二億ドルで歩み寄った。

伊藤 だから池田が怒ったわけだよ。俺はね、それを知らないで池田邸に行ったのだよ、ある日。そうしたら一間を越えて向こう側に池田がおって、大平の奴はまったく怪しからん。お前からも言っておけ」とか言ってるね、「大体、お前までも一緒になって、大平をブレイアップするから、こういうことになるんだ」と。「そういうことになる」ということが俺には分からないんだよ。それは、その

実 前の組閣の時に田中角栄と結んで外務大臣と大蔵大臣を取った。そして、世代交代派だからね、ペー  
就 ジを少し二、三ページ先にめくっちゃまえ、中二階にいる奴はおっ飛ばしてしまえ、そしてわれわれの  
華 時代に入るんだということをやったわけだよ。そのことを怒っているのかなと思っただよ。そうし  
去 たら、栄家の女将は俺をきらいなんだけれども、俺に頼むんだよ、「オトウチャンのところへ、あんな  
た、行ってくれ」と。なんか池田が大平へ「ブー公も、お前のところへなんか行かないぞ」とかいう  
ようなこと言ったんじゃないかと思うんだ。それで非常にブーチャンがこないことを大平は気にして  
ると言うから、あんた行ってくれないかと言うんでね。おかしいな、何でまたそんな、俺は組閣問題  
のことで行くのかと思っただよ。それでまあ、とにかく栄家の女将に言われたから行ってみたんだよ。そ  
れで大平に会って、何だかわけのわからないことを喋って、そのまま帰ってきたと思うよ。

ただ後で俺、大平・金メモのことは栄家の女将に聞いたんじゃないかと思うんだよ。大平が代理で  
まとめちゃった、OKを出したことを知りませんでしたからね。それでいつまで経ってもOKが実現  
しないので、金鐘泌が頭にきちゃって、どうしてこのOKが実現しないんだと言ったら、大平は「池  
田さんがジェラシーを感じているのだろう、政治家として」と。つまり、こんな大きな仕事を池田が  
まとめきれないうちに、大平がまとめちゃったということに対して、ジェラシーを感じているから、  
簡単にOKしないんですよ、ということと言った。そんなことを聞いたら、ドゴールと話して、ケネ  
ディと話して、日韓交渉をまとめようとした池田としては、カチンとくるわね。だから、一番悪い時  
に、大平と池田は外交問題でおかしくなったと思います。

——池田内閣を知っているという政治記者は、各新聞社でもほとんどいなくなっちゃった。

## 池田内閣の所得倍増計画の再評価

伊藤 だけどね、今、掘り起こしが行われているね。五百旗部真という神戸大学教授が池田内閣時代のことを掘り起こすんだというので、俺、レクチャーさせられたよ。関西の若手の政治学者ばかり集まってね。宏池会というのは政策で立ってね、しかも、時代に超然として、宏池会的なものというのを絶えず言い続けてきた。こんな派閥があるか、これは一体、何だというんで、宏池会というものをもう一回、調べ直そうということなんだね。

それから、僕より二、三年、先輩だった人から手紙をもらってね。『池田勇人 その生と死』を読んで非常に、昔、感動したけれど、今またさらに感動したというんだね。東大出た人でジャーナリズムに関係があり、どこかの大学教授だった人じゃないかと思うんだけど、池田内閣で所得倍増計画をやっていた時に、アメリカに行っていたんだって。アメリカも私自身も、この所得倍増計画は成功しないと見たところから成功したので、それからいろいろんな問題が始まったんだ、という意味のことを書いてきてね。あんたが池田さんとあいうことやったということは、私にとってはうらやましくてしょうがない。『池田勇人―その生と死』は、一つの古事記を語っているという。所得倍増計画は、日本が初めてアメリカに太刀打ちして、ひよっとすると勝つぞという武器を手にしたときの日本の状況を、あなたは書いている、と言うのです。これはね、とんでもないことなんだと言われて、俺、びっくりしちゃってね、俺はまだまだ役割が終わってないのだと（思った）。

もう一つ、実際、池田が死んでから後の私の仕事というのは、池田政権の所得倍増計画というのは、どいう意味を持つているのかを説明することだと。日本も池田時代が出てきて、それから佐藤の時代も出てきてね。佐藤は知らずに池田の後の所得倍増計画を充実させた男なんだ。あれは分からないものだから批判しながらも、あの時代に池田の所得倍増計画の美味が開花するんだよ。それで、下村治が俺に言うんだよ。「伊藤さんね、日本という国が今までの歴史で味わったことのかつてない、生活水準を手にするんですよ。こんな時代はないんですよ。その時代にわれわれが会えたということは、何と幸福なことでしょう」と。俺びつくりしたよ。彼は自信満々なんだよ。あんなことを言う男ではないんだがね。池田が死んだ後だよ。

伊藤昌哉（いとう・まさや）一九一七年、旧満州（中国東北部）生まれ。

東大法学部卒、西日本新聞社政治部記者から池田勇人通産相の秘書となり、その知遇を得て、池田内閣時代は「影の官房長官」と呼ばれるほどの政治的手腕を発揮する。七六年福田内閣では「内閣調査員」の肩書で福田首相と大平正芳幹事長とのパイプ役となり、大平内閣では大平総理の個人的指南役として尽力する。その後、政治評論家として『自民党戦国史』正統、『自民党孫子』、『哲学のない政治家が、国を滅ぼす』などの著書を発表。